

勝利への道

負けを知ると勝利がついてくる！



FX投資に必要な2つの分析方法
プロが入門者向けに徹底解説

株式会社ミンカブ・ジ・インフォノイド
外国為替情報担当編集長 **山岡和雅**



目次

第 1 章 なぜ FX で負けるのか 3

~負け方を知ると勝利がついてくる

第 2 章 テクニカル基礎と実践 8

~おさえるべきテクニカルはこれ

第 3 章 ファンダメンタルズ分析は難しい 13

~これだけおさえておけば大丈夫な基礎知識と情報収集

第1章 なぜFXで負けるのか

~負け方を知ると勝利がついてくる

例えばドル円を105円で1万ドル買った時、106円になって1万円儲かるのか、104円になって1万円損するのか、何も考えなくても勝率は5割。そこにチャートを分析したり、ファンダメンタルズ分析で今後の動向を分析したりといった作業が加われば、トータルでは負けそうにありません。でも実際には「負けた〜」「FXで儲けるのは難しい・・・」となっている個人の方が多くことも事実です。

なぜFXで負けるのでしょうか。それは負け方が悪いからです。

FXで儲けるために、チャートの見方を勉強したり、経済指標について学んだり、各国の経済ニュースを確認したりと、いろいろと必要なことはあります。ただ、それらは基本的に1回の取引での勝率を5割から上げるというために必要なこと。それよりも大切なのは、1回の勝ち負けではなく、最終的に収益を残すために、いかに勝ち、いかに負けるか、全体の勝ち負けをコントロールすることです。

実は、最初に勝率は5割と書きましたが、なにも意識せず取引すると、最終的には負ける人がほとんどです。それは負け方が悪いから。

ほとんどの人は負けるのは嫌です（当たり前です）。なので、ポジションを取った後、思っているのと逆に相場が進んで評価損が膨らむと、我慢してしまいます。最初の例ならば、105円で買って、104円になったとしても、もうちょっと我慢すれば戻るかもしれないから我慢してじっと持ったままにしてしまう。そうするとどうなるか。実はかなりの割合で戻ります。なので、次に同じことがあっても同じように我慢する。戻るという繰り返し。勝率は上がります。

でも、戻らなかった時、1回ですべてを吹き飛ばしてしまいます。我慢してもドルが戻る経験をすればするほど、損失を確定させるということが出来なくなります。結

果、これ以上ポジションを保持できない強制ロスカットを食らって終了といった具合です。

儲かっているとき、目標まで来ると利益を確定するということを繰り返すと、たとえば 10 回の取引で 9 回勝てたとしても、1 回の損ですべてを吹き飛ばしてしまうというわけです。

極端な例に感じるかもしれませんが、投資家心理的に損は我慢しやすく、儲けは我慢しにくいもの。特にいったん儲かってそこから儲けが減っていく局面などは我慢が効かないことがほとんど。最初の例でいうと、106 円に利益確定を置いて、105 円 95 銭まで付かず、そのまま下がりそうになったら、105 円 90 銭で、もうこれでいいやと利益を確定したりしがちになります。一方で、104 円まで下がったら、いや、もうちょっと我慢したら戻るんじゃないかと思って、耐えてしまいがち。繰り返しになりますが、相場は上下しますので、耐えれば戻る確率はそれなりにあります。ただ、

いつか戻らなかった局面で破綻します。相場の格言に「大きく勝って、小さく負ける」という言葉がありますが、実際には「小さく勝って、大きく負ける」になりがちなのです。でも、それは仕方のないこと。人は弱いもの、何も考えなければ、それが普通なのです。

では、どうすればいいのでしょうか。

分析力を上げて、そもそも負けないようにする？

無理です。

チャートも経済状況もすべてドル高を指している局面があったとします。買えば 8 割がた儲かるでしょう。でも、買った後、例えばトランプ大統領がいないことを言ったことで一気に下がるかもしれません。ヘッジファンドが売りで仕掛けてくるかもしれません。どこかの国がミサイルを発射するかもしれません（個人的な例ですが、

ドルを思いっきり買った時に、2001年の同時多発テロ事件が起こり、真っ青になったことがあります）。そのような状況を事前にすべて把握することは出来ませんか、負けるときは負けます。

最初から決めた水準に来たら、ちゃんとやめる。

これも考えているだけなら無理です。

実際に相場を見ていると、戻りそうに見えるもの（認知バイアスといいます。要は自分に都合のいいように見えるということ。発言・指標結果・チャートの状況などいろいろなもの、自分が正しいように見えてきます）。また、困ったことに、戻るケースも多いのです。なので、やめられない。

それどころか、買い増したりします（戻るように見えているから）。で、元の水準に戻って、ほら、儲かったなんて思ったりします。で、戻らなかった時には、ポジションまで増えて損があり得ないぐらいに大きくなったりします。

ではどうするか。

事前に1回の取引でやめるポイントを決め、ポジションを取ったらその水準に確実にストップを置くことです。で、基本的にはそのストップを変えない。

勝率自体は、耐えるときに比べると格段に悪くなります。そのあと戻って悔しい思いをすることも多いです。でも、最終的に勝ち残る人は、きちんと負けを確定できる人です。

戻るように見えるならば、ストップがついた後、一呼吸おいて、もう一度相場を見て、それでも戻ると思えば新しくポジションを作ればいいです。ポジションがなくなって、一呼吸置く（これが大事です、そのまま見続けてしまえば意味がないです。コーヒーでも飲んでブレイクしてください）。これで認知バイアスが解けますので、そ

れでも戻るように見えれば、新たな取引としてポジションを取ればいいです。で、その時は新しくストップを設定します。

大事なことは、最終的に収益を残すこと。一回の取引で損を出さないことではなく、十回、百回と取引を繰り返す中で、収益を積み上げていくことです。

最後にポイントとテクニックを3つ。

1) 利益確定と損失確定の値幅をどれくらいに設定すればいいか

これは、取引する人1人1人によって違います。重要なのは時間軸。1回の取引にどれくらいの時間をかけるつもりなのかがキーになります。例えば1回10分での取引を考えているのであれば、1円を狙いに行ってもまずつかないです。1回1日の取引を考えているのであれば30銭を狙いにくのは近すぎます。取引する通貨と相場状況によっても違いますが、1日のうちに何度か取引を繰り返したいという短期取引であれば30銭-50銭、1回ポジションを作ったら、利益確定とストップの注文を置いて、持ち続けるという中期投資であれば、1円半から2円程度が1つの目安です。

2) ぎりぎりで利益確定がつかなかったり、ぎりぎりでストップがついてしまったらというケースをどうするか

ある程度は仕方がないですが、1つ言えることとしては、最初に利益確定とストップを置くときに、50銭利益確定が狙えるなという場合は45銭のところにと、少し手前に。30銭でやめようというときは35銭のところにと少し遠くに注文を置きます。これならば、44銭まででぎりぎりつかなかったとしても、もともと50銭見ていて44銭ならば、最初の見方がダメだったということ。35銭でぎりぎりついたとしても、最初のストップの見立てが甘かったということです。なお、そううまく50銭狙えて30銭でやめられるような局面はないと思われるかもしれませんが、そんな時は無理にポジションを取らないことが大事です。

3) ストップを変更するケース

ストップは基本変えないと書きましたが、実は変えていいケースがあります。ストップを手前に引き付ける場合。最初の例でいうと、105 円で買って、105 円 50 銭まで上昇。まだまだ上がりそうという場合に、利益確定をもう少し上にずらして 106 円 50 銭に、ストップも併せてずらして 104 円 50 銭に。もう少し上がっても、まだ勢いが続きそうならば、利益確定を 107 円に、ストップを 105 円にとずらして、儲ければ当初 1 万円のつもりが 2 万円に、反転してしまってストップがついても損益はゼロという格好になります。

とはいえ、こうした柔軟な変化には慣れが必要。ある程度投資を続けて、相場動向の見通しが上達したなと思ってからのテクニックだと思ってください。

第2章 テクニカル基礎と実践

~おさえるべきテクニカルはこれ

第2章、第3章では、1回の取引における勝率を上げるための分析方法についてみていきます。第2章はテクニカル編です。

まず、そもそもテクニカル分析とは何でしょうか。

簡単に言うと、これまでの値動きから、今後の値動きを予想しようというもの。

過去の値動きをチャートに表して、そのパターンを分析。過去似たようなパターンの時に次はどのようなようになったかを分析し、今後の値動きを予想していきます。

それこそ江戸時代の米相場の時代からこうした分析はあったといわれ、歴史の長い分析手法です。それだけに様々な分析手法が存在します。本屋さんでテクニカル分析の入門書を開いてみると、多種多彩な分析方法が載っていて、何を使えばいいのかと迷ってしまいそうです。

基本的には自分の好きなものを使えばいいですが、大事なポイントが2つあります。

- ① 皆が使っているものを使う
- ② 時間軸を意識する

この2つです。

まずは①皆が使っているものを使うから説明していきます。

相場で値動きを決めるもの、それは「需給」です。要は買いが多ければ上がり、売りが多ければ下がります。

とはいえ、外国為替市場では世界中からいろんな立場の参加者が売り買いを行っています。日本の輸出企業が外国で売った商品の代金（外貨）を円に換える。海外旅行をする人が空港で円を外貨に換える。といった取引。米国の株が上がりそうだから円をドルに換えて米国の株を買うといった取引。さらには純粹に為替相場の値動きで利益を取るために売ったり買ったりといった取引。まさに多種多様です。そうした中で、全取引に占める割合が圧倒的に大きいのが、値動きで利益を取るために売ったり買ったりする投機的な取引です。

こうした投機的な取引の基となる、上がりそうだから買う、下がりそうだから売るといったときの、上がりそう、下がりそうの基準は、取引参加者それぞれで違います。ただ、そこで大事になるのが、買いが多ければ上がり、売りが多ければ下がるという原則。例えばトランプ大統領が何か言ったとき、取引参加者のほとんどがこの発言はドル売りだと思ってドルを売れば、実際には全く経済に影響しない発言であったとしても、ドルは下がります。テクニカル分析で言えば、取引参加者の多くが見ているチャートがあり、そのチャートで明らかに買いというポイントがあれば、実際に買う人が増えて上がります。チャートでこの水準を割り込めば損切覚悟で売りだと思ふような水準があれば、抜ければ実際に売りが入って下がります。

取引を行う中で、自分独自のチャートを考案してもいいですし、数あるチャートの中から、マイナーだけど自分にはこれがあると思うものを見つけるのもいいですが、そうした場合でも、まずは皆が使っている基本をおさえておく。これが大事になってくるのです。

では、基本は何。ということになります。

ローソク足・移動平均・トレンドラインまずはここからです。

ローソク足で、高値安値を含めた値動きをきちんと把握する（終値ベースの数字をつなげたラインチャートだと、一時的な高値・安値が把握しきれないので、要注意）。続いて移動平均を引く。トレンドラインを引く。ここまでは確実に行います。

移動平均線の引き方、トレンドラインの引き方については、②の時間軸を意識するについても含めて、説明していきます。

続いて②時間軸を意識する点について。

取引中、画面に余裕があればチャートは開きっぱなしにしたほうが、動きが一目で分かって便利です。その時、基本的には足の短いチャートを開きます（例えば日足のチャートを開きっぱなしにしても、別に変ったりしませんから）。

瞬間瞬間の動きを読んで、数銭を狙いに行くスキャルピングを主体する場合や、経済指標発表前後で瞬間の動きが大事になるような場合を除いて、5分足程度が向いています。

ただ、その時でも足の長いものをまず確認してから取引に向かいます。具体的には週足、日足、時間足と確認して、それから5分足を確認していきます。

理由は2つあります。

1) トレンドを把握する

相場にはその時々の方角性があります。その方角性は各国の経済・政治状況、株式など他市場の動向などによって変化していきますが、大事なポイントは今どちらを向いているのかを把握することです。例えばドル高円安トレンドの中では、その日の動きとしてはドル安方向に見えたとしても、すぐにドル高に回帰する可能性が高まります。第1章で上がるか下がるか、サイコロを振って決めても5割と書きましたが、トレンドに沿った方向で取引をすることで、5割から少し確率を上げることが出来ます。週足で確認できるような超長期的なトレンドはどちらを向いているか、日足で確認できるような長期のトレンドはどちらを向いているか、時間足で確認できるような中期のトレンドはどちらを向いているかなどを確認して、その時々取引に向かう、それだけでうまくいく確率がちょっと上がる。その積み重ねで最終的には大きく儲けるという流れです。

2) 皆が見ているものを確認する

先ほどの①でも示したように、テクニカル分析のコツの1つが、皆が確認しているポイントをおさえること。週足や日足のチャートで、少し長めのトレンドラインを引く、直近だけでなく長期にわたっての高値安値や、これまで何度も進行を止めたようなポイントとなる水準を確認するといったことは、多くの取引参加者が実施していること。皆がポイントだと思う水準は、売り買い注文が並んで実際に重要なポイントとなりますので、そうした水準をきっちりおさえることです。

また、移動平均線、ボリンジャーバンド、一目均衡表など、メジャーなテクニカル指標は、日足ベースでそのチャートが示すポイントがどのあたりにあるのかを把握している参加者が多いです。高値安値などと同様に、そうしたポイントでは売り買い注文が入りやすくなっています。

例え週足や日足で示されるような長期のスパンでのポジションを取るつもりがなく、1日の中で何度も取引するような積極的な取引を目指す場合でも、その売り買いのめどとなるポイントを週足や日足などで確認しておくということです。

続いて、入門編としておすすめのテクニカル指標です。

入門編としては、先に挙げた移動平均線に加え、ボリンジャーバンド、一目均衡表をおさえておきましょう。

この3つの分析手法はほかの手法に比べて圧倒的に利用者が多く、その分ポイントがポイントとして作用しやすくなります。いずれも日足でポイントを確認し、時間足、5分足などでさらに直近のポイントを確認して取引に臨みましょう。最初のうちは面倒かもしれませんが、慣れれば取引に入る前のルーティーンとして手際よく確認出来るようになります。

最後に今あげた3つの分析手法を見るにあたってのそれぞれのコツをご説明します。

移動平均線は短期・中期・長期の組み合わせが重要。日足の場合短期は5日がおすすめ。ちょうど1週間の営業日という意味があります。その他の足でも日足に合わ

せて5を使うケースが多いようです。中期のおすすめは21日。これは実はちょっと利用が分かれていて、20日派、25日派もいます。

日足で考えると約ひと月の平均ということになります。月の営業日はその月々によって違いますから、移動平均線としての採用日数が違うのも仕方ないところ。その中で21日をお勧めするのは、短期の5日もそうですが、フィボナッチ数列だからです。市場ではフィボナッチ数列を重要視する参加者がそれなりにいるため、皆が見ているものを見るという観点でもっともふさわしいと思います。ちなみに相場が大荒れでもしない限り、20日でも25日でも、それほど数字はぶれません。

長期は89、90、100の3種のうちどれかを選ぶのが一般的。加えて200日線を確認しておきましょう。200日線の場合現水準から離れすぎていて、参考にならないケースが多いですが、近くにある時はポイントとして強く意識されます。

一目均衡表はデフォルトをいじらないことがポイント。多くの利用者が一般的な設定のまま利用しているようです。

もう1つ一目均衡表は対円の通貨ペアのほうに向いています。この分析手法は日本発祥。海外の参加者も使うようになっていますが、日本人の利用率をはるかに高いとみられます。

ともにポイントとして挙げた皆が使っているものを使うという方針に沿ったものとなります。

ボリンジャーバンドも基本は設定どおり。なお、時間足や5分足などの足の短いチャートでも利用しやすいこともポイントになります。

3シグマの水準はデフォルトで出ていない可能性があります。為替市場は買われすぎ、売られすぎという状況になりやすく、2シグマでは対応できないケースもあります。

この3つとトレンドライン、まずはそこからのスタートです。

第3章 ファンダメンタルズ分析は難しくない

~これだけおさえておけば大丈夫な基礎知識と情報収集

最後、第3章はファンダメンタルズ分析です。

実は初心者の方にとって1番ハードルが高いのが、このファンダメンタルズ分析。

そもそもファンダメンタルズという耳慣れない言葉、日本語にしても「経済の基礎的条件」などとはよくわからない言葉が出てきます。

景気動向を分析して、この後の相場動向を見極めることだと解説されても、日本経済の状況位は何となく肌で分かっている、米国経済の状況となるとハードルが一気に上がります。さらに欧州経済、豪州経済、それこそ南ア経済の動向まで進むと、これまで気にしたことのない場合がほとんどでしょう。そんなものを1から分析して、といわれても、ハードルがあまりにも高くて、下をくぐれそうです。

実は、そこまで難しく考えることはありません。ポイントは3つ。

1つ目は、有事は円買い。

2つ目は、とりあえずアメリカ。

3つ目は、各国通貨の特徴を知る。

1) 有事は円買い

為替市場の動きというのは、ようは各国・地域を超えて動くお金の動き。儲かりそうだなという国にお金が集まり、危なそうだなという国からはお金が出ていきます。

儲かりそうだなというのは、景気が良くて、投資機会がいっぱいあって、株価が上がっていく期待があって、金利も高くなる期待があってという国。その国に投資すれば設ける機会があるとなると、世界中からお金が集まって、その国の通貨が上昇します。人やモノと違い、お金というのは簡単に国境を超えていきますので、例えば経済指標が強くてちょっと景気がよさそうだなぐらいでも、ある程度その国の通貨が買われたりします。

危なそうだなというのは、戦争が起きそうだとか、政情が不安定とか、リーマンショックのような大きな経済ショックがあるみたいな状況。

そして、大事なポイントとしては、危なそうな状況からの逃避という行動は、時として儲け云々よりも強い動きとして、相場をリードします。普段はここでは2%ぐらい儲かりそう、ここなら5%儲かるかなという選択をしている中で、このままではお金が全部なくなるかもと思えば、何をおいても逃げ出すというわけです。

極端な例ではリーマンショック直後や911米同時多発テロ直後。その他、英ブレグジットの進展や米中通商問題の激化などの局面では、世界の投資資金は儲け云々はともかく、とりあえず安全なところに逃げようとします。この時安全なところとはどこか。

日本円です。

かつては何かあると世界で最も流動性の大きい米ドルにお金流れ「有事のドル」といわれていた時代がありました。しかし、911同時多発テロで米国が当事者となったことで、こうした動きは弱まりました(正確には90年台の湾岸戦争からその傾向がありました)。

代わって有事に買われたのが、永世中立国として各国の紛争などの影響を受けにくいスイスフランです。しかし、そもそも市場規模が小さく、機関投資家などの大きな投資資金の受け皿として不十分なこと、対ユーロでのスイスフラン相場を安定させようとして失敗し、2015年にスイスフランショックを起こしたことなどから、有事のスイス買いの動きも弱まりました。

そうした中、代わって買われるようになったのが日本円です。ドル、ユーロに次いで、外国為替市場で3番目の取引量を誇り流動性の問題が起きにくいこと、対外純資産残高が2018年末時点で28年連続世界一と、豊富な対外資産を持ち、通貨ショックなどが起きにくいこと、また、有事の際にリスクのある対外資産を日本円に戻す動きが期待され、円買いが入りやすいことなどが背景にあります。

で、そうした理由はともかく、

危ない時は円買い」このルールを覚えておくことです。

リーマンショックなどのような状況が起きればどの国にとっても基本的にマイナスで、通貨の売り材料ですが、少なくとも円は買われます。

2) とりあえずアメリカ

リスク警戒感が強い局面はともかく、通常局面ではお金は儲かりそうなところに流れます。その時、儲かりそうの基準となるのが、経済指標結果から推測される各国の景気などの状況。とはいえ、経済指標といっても色々な種類があり、すべてを把握するのは難しいですし、取引しようという国の指標を全部見るのも大変です。

実は入門編としては簡単の方法があります。米国だけ見るのです。

いや、私の取引したいのはユーロ円でアメリカ関係ないですという場合もあるでしょう。それでも確認するのは、日本の指標でもユーロの指標でもなく、まずは米国の指標です(日本やユーロの指標をみるなどとは言っていない)。

外国為替市場でドルは87%と圧倒的なシェアを誇り、取引の中心となっています。また、世界1位の経済大国である米国は、景気動向が他の国に与える影響も圧倒的です。

その為、米国の経済指標が相場全体に与える影響は非常に大きいものとなっています。米国の指標が強ければ、ドル円だけでなくユーロ円や豪ドル円なども上昇、もちろん逆もありという動きを見せます。

なので、まずは米国の代表的な指標をおさえる。これでOKです。

おさえておきたい米国の指標は、雇用統計、GDP速報値、消費者物価指数(CPI)、小売売上高、ISM製造業・非製造業景気指数。

それぞれの説明を簡単に。

雇用統計：とくに非農業部門雇用者数(NFP)が注目される。米国の中央銀行であるFRBの二大責務は、雇用の最大化と物価のターゲット近辺での安定。そのため雇用統計の動向が金融政策に大きな影響。

GDP 速報値：米国の経済状況をもっともよく表した指標。トランプ大統領が年 3% の経済成長（GDP 成長率）を掲げており、政策にも影響。

消費者物価指数：FRB の雇用と並ぶ責務である物価の安定。ターゲットは PCE デフレーターで CPI ではないが、動きがほぼ相似するため、発表が早い CPI に注目が集まる。水準は PCE のほうがまず低く出る。

小売売上高：米 GDP の約 7 割を占める個人消費動向をまともに表す点で要注意。

ISM 製造業・非製造業景気指数：アンケート調査による企業の景況感調査。実際の景気変動に先行することが多く、今後を見据えるうえで重要視される。

中でも、雇用統計は FX 参加者にとって月 1 のビッグイベントとして注目を集めており、相場への影響が大きいものとなります。

過去の発表時の結果とその時の値動きなどを、実際の取引を始める前に見ておく、参考になると思います。

3) 各国通貨の特徴を知る

最後に取引を行うとする通貨の特徴だけはおさえておきましょう。

2 で米国の指標だけで大丈夫と書きましたが、その他通貨で唯一おさえておいたほうがいいのが、政策金利などの金融政策動向です。

各通貨の金利水準が今どれくらいなのかというのは、長く買いポジションを持った時に得られるスワップポイントの目安になりますし、その変化によって、スワップポイントの額も変化するのできちんとおさえましょう。

金利が高い安い以外にも各通貨にはそれぞれの特徴があります。円でいえば最初に挙げたリスク警戒感が強いと買われる、ドルでいえば圧倒的な取引シェアで市場の

中心みたいなことです。値動きを予測する際の基本となりますので、覚えておきましょう。

ドルと円以外の主な通貨の特徴を簡単に羅列します。

ユーロ：ドルに次ぐ流通量。ドルの代替通貨としてドル安ならばユーロ高といった動きになりやすい。

ポンド：四大通貨の 1 つとして流動性がある割には動きが激しい。最近では BREXIT（ブレグジット）が話題

スイスフラン：世界で最も金利の低い通貨。有事には買われやすいが続かない。

豪ドル：かつての高金利通貨。中国との関係が深く、中国の指標が強ければ買い、弱ければ売りなど、中国動向に左右。

NZ ドル：かつての高金利通貨。こちらも中国と関係が深い。資源国のようなふりをした酪農国。

カナダドル：先進国唯一の純産油国（輸出＞輸入）、NY 原油が上がるとカナダ高に。

南アランド：高金利＆資源国＆新興国。世界経済のリスクが強まると売りが出やすい。

ここまで上げたポイントをおさえればファンダメンタルズ分析の初級編はクリアです。

■免責事項

本レポートは、投資一般に関する情報提供のみを目的にしたものであり、投資の勧誘を目的としたものではありません。投資に関するすべての決定は、ご自身の判断でなさるようお願いいたします。本レポートに記載されているいずれの情報についても、その信頼性、正確性、完全性等について保証されておりません。本レポートに基づいて被ったいかなる損害についても、株式会社ミンカブ・ジ・インフォノイドおよびキャンペーン元である株式会社DMM.com証券は一切の責任を負いません。本レポートに掲載されている内容の著作権は、株式会社ミンカブ・ジ・インフォノイドまたは情報提供者に帰属します。本レポートに掲載されている情報を株式会社ミンカブ・ジ・インフォノイドの許諾なしに、営業に利用することはもちろん、第三者へ提供する目的で情報を転用、複製、販売、加工、再利用及び再配信することを固く禁じます